

東西文明の比較 (12)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

「1万年以上続いた平和な日本列島へ、大陸から大量の渡来人が流入し、縄文人を蹴散らして弥生文化を築いた」。私たちは歴史の授業で、このように教わりました。今でも一部の学校では、そのように教えているそうです。

縄文時代から弥生時代へ

縄文文化は、エジプト・メソポタミア・インダス・黄河文明に次いで「世界の五大文明」としてもいいのではないかと思います。事実、そうした説を述べている学者もいるようです。平等な社会を1万年以上続いた縄文時代について、日本人はもっと自慢をし

ていいのではないのでしょうか。本稿から「弥生」について書こうと思います。

弥生時代の始まり

最初の弥生土器が発見された場所が、現在の東大本郷キャンパス付近（東京府本郷区向ヶ丘弥生町）だったことから「弥生」の名がついたことはご存じだと思います。

弥生時代の始まりは、紀元前800年ごろといわれます。弥生時代「早期（紀元前1000年）」を設けて縄文時代晩期と重複するという説もあります。（時代区分＝後記）いずれにしても時代区分は、「本のページをめくる」ように一挙に変わるわけではありません。弥生時代は土器の形式によって、前期・中期・後期に区分されます。弥生社会は、その区分によって独自の異なる姿を見せます。

弥生前期は、めだつた発展（変化）が見られません。人口200～400人程度の農村が平和裏に暮らしていたようです。土器は「無文土器」という朝鮮半島の土器に似た「弥生土器」が広まります。ところが中期になると一変します。江南から銅鏡や銅剣、銅矛などの青銅製の祭祀が流入してきました。農機具などを造る鉄

器も運ばれてきました。そして銅鏡などを用いて祭祀を行う首長が納める小国が、各地に出現します。

弥生時代後期は、邪馬台国の女王、卑弥呼の時代です。この時代には、邪馬台国のような小国が各地に興り、それらが連合して、やがて日本統一に繋がっていくのですが。

弥生文化とは

稲作に加えて青銅器と鉄器の発達に特徴付けられます。

まず、イネの日本への伝播から進めたいと思います。従来の説では、稲は中国華北から朝鮮半島北部、南部を経由して北九州へ伝わったとされてきましたが、これは間違いだと思います。最近の中国の稲（ジャポニカ種）の遺伝子研究では、日本で普及したジャポニカ種は「長江下流付近から直接、北九州へ伝播した」という説が強くなりました。その時期は紀元前3世紀頃と言われます。

水田を作って稲を育てる「水稻耕作」は、日本に重大な変化をもたらしました。土地の占有による貧富の差、集団における指導層の誕生などです。

水稻耕作は、朝鮮半島南部から伝わったと考えられています。江南の水稻耕作が朝鮮半島の中部を経て南部に広まったのは紀元前1100～1000年頃。そしてその技術はいち早く日本に伝えられました。

近年、水耕稲作は縄文時代には、すでに存在していたことが判明。福岡市板付遺跡や唐津市菜畑遺跡、大阪府茨木市牟礼遺跡などから縄文晩期の土器などと一緒に水田跡が発掘されています。このことから、朝鮮半島南部の人々との交易を通じて水耕稲作の技術を得た縄文人の一部が、狩猟・採集をしながら、その合間に水耕稲作を行っていたと考えられます。

次に青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わる

西欧から中近東の歴史では、まず青銅器が発達し、鉄器については大分遅れて発達したと記されています。ところが日本では、それらがほぼ同時期に導入されました。その理由は楽浪郡との交易にあります。楽浪郡とは、前漢朝（紀元前202～後8年）の植民地です。

弥生時代に朝鮮半島から伝わった稲作用の石器や木器、耕作用の鋤や鍬、粃の脱穀用の木臼や豎杵、沼

地で使う田下駄や田舟も、その源流は中国です。水耕稲作とともに機織りの技術も入ってきました。弥生人は紡錘車で糸を紡ぎ、機織りして布を作っていました。

弥生文化は、中期(紀元前40年頃)に入り急速に豊かになりました。江南(揚子江下流域)との直接交流が始まったからです。この時代、九州北部を中心に有力な墳墓が広がり始めました。それらは小国の王墓と見られています。最古の王墓は、福岡市吉武高木遺跡。木棺墓を囲むように配列された百五十基の甕棺墓(大型の土器に遺体を収めた墓)が出土しました。木棺墓から前漢の銅鏡・銅剣・ヒスイ製勾玉が出土しました。更に木棺のそばから銅矛・銅戈・管玉百個が見つかっています。

前漢の歴史を記す「漢書」地理志という班固の手になる中国の正史に次の一文があります。

「楽浪郡の付近の海の中に、倭人が住んでいる。かれらは百余りの国に分かれている。そしてしばしば交易を求めてやってくる」と。

徐福伝説の謎…彼は日本に何を伝えたのか

ここで新説を述べてみたいと思います。この「説」は、私が以前、何かで読んだ本にヒントを得たものです。その後、ウィキペディアなどをつまみ食いしたモノですから、“珍説”と言った方が正しいかもしれません。

みなさん、「徐福」をご存じですね。秦の始皇帝から不老不死の薬を探すよう命じられて、日本へ来たとされる人物です。時期も稲の日本へ伝播した頃と一致します。この伝説は有名な司馬遷が著わした「史記」にありますから、その可能性は十分考えられると思います。

日本各地に徐福を祀る神社や伝説地があります。北は青森県から南は鹿児島県まで分布しています。それぞれの伝説地には、「焼き物技術を伝えた神」として徐福神社(三重県熊野市波田須)、「捕鯨の技術を伝えた神」として須賀神社(和歌山県新宮市)、「織物をもたらした神」として太神社(山梨県富士吉田市)などが有名です。

史記の「秦始皇帝本紀(紀元前219年)」に興味深い記述があります。

「齊の人、徐福等書を奉りていう、海中に三神山あり。名付けて蓬萊、方丈、瀛州^{えいしゅう}という。僊人^{せんじん}これに居る。請う、齊戒して、童の男女とともにこれを求むるを得ん。徐福を遣わして童の男女数千人を発し、海に入りて僊人を求めしむ」

また、史記の「淮南衡山列伝」に次の記述があります。

「皇帝おおいによろこび、童の男女三千人を遣わし、これに「五穀の種」と「百工」をおくりて行かしむ。徐福、平原広沢を得て、止まりて王となりて来たらざりき」

先の徐福伝説と史記の記述を重ね合わせると従来の教科書で教えられた「弥生時代」が姿を変えてしまいます。なお、最近の中国における徐福研究によると、徐福の出身地が、ジャポニカ米の誕生地である長江流域に近い江蘇省であることが分かりました。ここから東へ行けば北九州に到達します。おそらく、このあたりには古くから、そうした言い伝えがあったのではないのでしょうか。

この伝説を“正当化”するもうひとつの理由があります。男女三千人が中国には戻らなかったという記述が史記にあります。日本に定住して、やがて縄文人とも共同生活を始めたのでしょうか。その証拠が西日本の人口が急増したことです。縄文晩期から弥生前期の人口は、おおよそ26万人といわれ、そのほとんどが東日本に住み、西日本にはわずかに1万人しか住んでいなかったといわれていました。それが、急激に人口が増加したことは、徐福が連れてきた「三千人の童」と大いに関係があると思います。縄文人との混血、「弥生人」が誕生したと考えても良いのではないのでしょうか。そして、始皇帝から遣わされた「百工」からは中国の新技术がもたらされました。また、「五穀」のなかには当然稲も含まれていたでしょう。

注)弥生時代について：4つの説があります。

1. 縄文時代晩期(紀元前1000年ごろ)に弥生時代早期が重複する。
2. 縄文時代晩期が紀元前800年頃終了し、弥生時代前期が始まる。
3. 縄文時代晩期が紀元前700年ごろ終わり、弥生時代早期が始まり、紀元前300年頃弥生時代前期が始まる。
4. 縄文時代晩期は紀元前300年まで続き、弥生時代前期が始まる。